

会議録

進 行 秋 元
記 録 浅 田

- 議 題 平成20年度 第3回 学校協議会
- 開催日時 平成21年3月14日
- 開催場所 本校 応接室
- 出席者 [委員] 加治佐さん 立石さん 宮坂さん
[学校] 松本(校長) 秋元(教頭) 小野(事務長)
山本(首席・学習指導室長) 堀(指導教諭・学校運営室長)
浅田(学年室長) 森(進学対策委員長)

■学校長挨拶

①他校の意義ある取組を本校教育活動に活かすため、先日、学習指導室長の山本首席と進学対策委員長の森教諭に、広島県立のON高校を視察させた。

②本校の入試倍率は、2.2倍と高くなった。合格者の層に幾分かの変化が生じるのではないかと。

③第4期生の進学状況については、その合格者の概数は、国公立15、関関同立40、産近甲龍100を超えた。なかでも、神戸大、千葉大、京都府立医科大と開拓が進んでいる。

■議事内容

[秋元教頭]

今回、第3回は、第1回「本校の取組と課題」、第2回「地域とのかかわり」に続いて、「学力向上と進路指導について～その効果的な施策とは～」をテーマに、協議いただきたい。

1. 学校からの報告

[森進学対策委員長]

報告：「広島県立ON高校の施策に学ぶ～その視察から見えたもの～」

広島県立ON高校は、この数年間で、その卒業生の85%が国公立大に現役合格するという実績を上げるに至った。ぜひ、その具体的な施策を探りたいと考えた。

資料：学校訪問報告書

〔山本学習指導室長〕

・ON高校は、国公立前期試験の直前まで、3年生に対して授業している。受験生にとって、予備校以上に魅力的な授業を実践していることは想像に難くない。

・近隣に公私立の進学校が存在し、超上位層の生徒がそれらの高校への進学を志望するという現実があり、課題として、地域の生徒・保護者の意識を変革できるような取組が必要と考えられる。その一つに、修学旅行がある。東京研修と位置づけ、大学訪問と企業訪問を内容とし、事後に発表会を設定するなどして、大学進学の前にある企業、すなわち、将来を見据えた進学指導の実践となっている。

・教員の態勢としては、実績を上げることが教員のやる気に結びつく、すなわち、東大や京大に進学できる生徒を育てられることが教員のやりがいとなるという共通認識もとで指導にあたっている。従って、担任になりたいという教員が多くいる。

・教育は、手を入れないと伸びないという理念から、入試問題を解くことことが教員のスキルアップの方法となっている。

2. 意見交換

〔加治佐委員〕

国公立に現役の85%が進学するとは信じがたい。それも、数値が伸びている。

〔宮坂委員〕

国公立大への進学のために、私立高校へと生徒が流れていく時代もあったが、ON高校の状況は学校改革が加速度的に進んだ例と言えるだろう。進学実績が著しく伸長する以前はどのような状況にあったのだろうか。

〔山本学習指導室長〕

自校に対する自負と人的な手当が総合した結果ではないか。

〔宮坂委員〕

昔、国公立大に8割が進学していた時代があったが、6割から7割に落ちている今の状況にあっては、ON高校は確かに進んでいる。

〔加治佐委員〕

公立高校の復権であり、その先頭に立っていると言える。生徒の学習時間が管理されており、その中には塾に通うことが想定されていない。公立高校と塾の共存ではなく、公立高校が全てを引き受けるということなのか。朝7時から夜11時までの労働を教員が受け入れている。優れた学校の調査では、確かに広島県に多いが。教員は、本当におもしろいと感じているかが疑問である。

〔山本学習指導室長〕

教員の、社会人としての力量ということではないか。

〔宮坂委員〕

評価・育成の在り方について、大阪と広島とではどのような現状の違いがあるのだろうか。

〔加治佐委員〕

大阪や兵庫は、学校長に委任されているが、広島はトップダウンの傾向にあるだろう。

〔堀学校運営室長〕

大阪でも進学重点校を設定するという動きがあるが、そのためには、教育資源、とりわけ高いスキルを持った教員を集中させていく必要があるのではないか。現状はいかがなものか。

〔加治佐委員〕

一つの高校が存続するためには、特徴・特長を打ち出さねばならない。都会に逃げていく生徒を引き止めて志望させるには、高いスキルを有する教員を集めることが肝要である。塾と結びつくことも一つの手段と言える。

〔宮坂委員〕

10～15年前の教職員組合の学力調査には生活実態調査も含まれていた。ON高校では、子どもの生活習慣と学力実態は結びついているということの気づきから出発したのではないだろうか。その結果として伸長したと考えられる。

〔加治佐委員〕

非常にていねいな指導がされているが、生徒にとっては管理されているという印象がぬぐえない。ON高校の修学旅行は、大学の先を考えさせるというキャリア教育の一環と位置づけられているが、企業名のみではなく、企業の魅力を教えるというところまでいかなくは持続しがたいだろう。

〔立石委員〕

学校全体が同じ一つの方向に向かっていることが伸長する大きなポイントとなるだろう。

〔山本学習指導室長〕

意識の高い保護者は、中学から私学に通わせる傾向にある。やはり、家庭と本人の意識を変えていくことが重要となる。

〔加治佐委員〕

近隣の公私立の進学校に生徒が流れる傾向にあるというが、ON高校の取組から考えれば、人気がないはずがない。指導の厳しさから倦厭されているのなら、それは自動的に選別されていることになるのだが。

〔宮坂委員〕

資料から見えるON高校の取組は、大阪の私立高校で取り組まれている内容と類似している。

〔山本学習指導室長〕

ON高校の何を本校に活かせるかということであって、決して本校の目標や教科書的な存在としたいということではない。子どもの力に応じた進路先を保障できているか、志望校を学校判断として提示できるか、生徒個々にスポットを当てた会議を設定し、学力を伸ばせるか、などがポイントとなる。

〔立石委員〕

生徒の進路決定について、担任が全体任せにしたり、子どもに圧力をかけたりしないようにあってほしい。

〔宮坂委員〕

習熟度別・目的別クラス編成は、大阪では可能だろうか。

〔松本校長〕

進路別科目選択によって、自然とその状態になっていくのが現状である。従って、教員が生徒をどう導くかということである。

〔秋元教頭〕

生徒のやらされている、管理されているという意識と、キャリア教育とをどう並立させていくかが重要となる。そうでなければ、進路決定に際して、生徒は安きに流れてしまうだろう。

〔宮坂委員〕

先輩・卒業生をいかに活用するかではないか。進路意識の向上には有用と考える。

〔立石委員〕

大学から社会に出て、学んだことがどう役立っているかという視点を活用するということだ。

〔加治佐委員〕

新しい公立高校像を打ち出しているということでは成功事例である。それは、組織そのものの大きな変革を呼ぶ教員の納得と、取組をキャリア教育で裏付けしていくことで存続していくものである。

3. 委員よりの提言

〔宮坂委員〕

現在、大阪の義務教育は揺れているように感じる。学校のスタンスが今ほど求められているときはないだろう。何となくではなく、明確に打ち出すべきである。そういう意味においては、槻の木高校は、リーダー校として育っている。今後は、キャリア教育の充実という視点から、社会貢献や社会をリードできる人材育成に努めて欲しい。

〔立石委員〕

卒業生が社会に出てどのように役立っているかを追跡調査し、槻の木高校の教育活動に活かしていくことが有用である。一流と言われる大学を卒業すれば必ず成功するわけではない。幅広く捉えながらの進路指導に心掛けるべきだ。

〔加治佐委員〕

出口と入口とに学校としての効力感が見える。地方に比べると、大阪の公立は弱いように思う。生徒が変わっていき、数値や存在価値を出すには、教員が変わらなければならない。教員の意識も含めて、「先生」をどう伸ばすかが重要だ。その点では、槻の木高校にはいい文化ができているようだ。教員間の協調性、すなわち、槻の木高校のあるべき姿を共有することが大切だ。最後は人事だ。

〔秋元教頭〕

生徒に教師が変えられる。生徒に教師が育てられる。その感は大きい。

〔松本校長〕

本校の次年度の課題は、次の2点

- ①教師力・授業力を高めること。
- ②キャリア教育の充実から生徒の進路決定のモチベーションを高めることである。すなわち、教育の質を高め、教員の力量の差を埋めることである。